

(4) 補聴について

①補聴器の役割

補聴器の1つ目の役割は、「音を大きくする」働きです。聞こえにくい小さい音を、聞こえる大きさまで増幅する機能です。2つ目の役割は、「大きすぎる音を小さくする」働きです。小さい音と同じように大きい音を増幅してしまうと、耳を疲労させ聴力低下を招いてしまいます。うるさく感じる音を快適に感じる大きさまで抑える機能です。3つ目の役割は「音の聞こえ方の特徴に合わせる」働きです。高い音が聞こえにくい人、低い音が聞こえにくい人など、それぞれの聞こえ方に合わせて音質を変える機能です。また、最近のデジタル補聴器では、これらの役割の他にも「雑音を抑制する」「聞こえにくい音声を強調する」などの機能がついているものもあり、装用者のニーズに合った細かな調整ができるようになっています。

②補聴器の種類

補聴器には主に耳掛け型、挿耳型、箱型の3つがあり、それぞれに高度用など難聴の程度に応じた種類があります。その中でも耳掛け型の装用者が最も多く、装用者の耳から型をとって作った専用の耳栓（イヤーマールド）につなぐことで、補聴器と耳を常に安定した状態に保つことができます。

また、補聴器のケースやイヤーマールドはカラフルになっていて、好みの色や柄で自分を表現する子どもが増えています。

その他、騒音の中や離れた人の話し声の聞き取りを改善するためのFM補聴システムや、骨へ音の振動を伝える骨導補聴器などがあります。

③補聴器の調整

補聴器は、ただつければ聞こえるようになるものではなく、聴力検査の結果からその人の聞こえ方や生活環境に合わせて調整する必要があります。補聴器を調整する専用の機械に接続し、パソコンで調整します。言葉が聞き取りやすい状態になるまで何度も調整することが必要です。

耳掛け型



挿耳型



④補聴器の管理

補聴器がいつも正常な状態で働いていてこそ、聴覚を活用することができます。子どもは活発なので知らないうちにぶついたり、壊したりすることがあります。また、イヤーマールドに耳垢などが自然に溜まったりします。毎日、補聴器をつける前、また、寝る前など補聴器を外したときに正常に働いているかをチェックしてください。子どもが小さいうちは保護者の役目ですが、だんだんと自分で管理ができるようにしていきます。



⑤人工内耳

補聴手段の一つとして、耳の中に電極を埋め込む**人工内耳**があります。補聴器は音を増幅して内耳に伝えるのに対して、人工内耳は内耳に挿入された電極が直接聴神経に電気刺激を送り、音を伝えるものです。人工内耳をつけると軽・中等度難聴の程度の聞こえ方になるといわれています。また、人工内耳は手術を伴う補聴手段ですから、手術における適応基準が定められており、医療と教育機関、家庭の連携が不可欠となります。人工内耳をつけて軽・中等度難聴になったといえども難聴者としての聞こえの困難を抱えていることを理解して対応することが必要です。

⑥補聴システム

学校などの雑音が多い教室や声が分散しやすい広い場所で、必要な情報を聞き取るようにするための、補聴システムがあります。スピーカーから大きくした音を出す方法は最も単純な補聴システムですが、音の大きさが十分でなかったり、音が壁に反響して聞きづらくなったりすることも多いです。ほかには、話し手の持つマイクを通して必要な音声を直接子どもの補聴器に届けるものがあります。音声を届ける方法によって、磁気誘導ループ方式、FM電波方式、赤外線方式などがあります。

(5) 聴覚活用・聴覚学習

①聴覚を活用することとは

聴覚に障害のある子どもは、周囲の情報から遮断される状況に置かれやすく、不安感や孤独



感をもちやすいといわれています。その情報不足からくる誤解も多いため、緊張感にさらされやすく情緒が安定しにくい面もあります。そのような聴覚に障害のある子どもが補聴器などを装用し、聴覚を活用するということは、周囲のことばや音を理解するだけでなく、**情緒の発達を促す**という効果をもっています。また、音楽を楽しむことで心が安らぎ表情が豊かになることや、母親との愛着・共感・信頼関係を基本とするコミュニケーション活動を活発にし、ことばを習得する基盤にもなります。

②聴覚を活用するために必要なこと

まず、子どもの音への反応や聴力検査の結果から「**装用している補聴器や人工内耳をその子どもの聞こえに合わせて調整し、周囲の音声が最も良い状態で入力される**」ことが必要です。この調整が行われていないとうるさい機器でしかなく、補聴器や人工内耳をつけたがらない原因となります。

次に、聴覚に障害のある子どもは十分な音情報が届きにくいいため、周囲の音情報を主体的に獲得する「**聴こうとする心**」を育てることが大切です。その聴く心は、大人と子どもの豊かな関わり合いの中で育ちます。

③聴覚を活用した学習

以上のことから、早期から補聴器をつけ聴覚を活用した学習が必要です。この学習は一人一人の子どもの実態やニーズ、さらには思考や主体性を尊重しながら進めていくことが大切です。

幼児の段階では、遊びや日常生活場面で聴覚を活用し、聴く心を育てていくことをめざします。具体的には、台所の音や自動車のクラクションなどの生活の音、動物の鳴き声や音楽、歌などといった身近な音に気付くことから始まり、聞くことを楽しめるように周囲が援助します。また、話したことばを聞き取ったり、聞き分けたりする力の育成もめざしていきます。

小学生以上になると、自分の聞こえや補聴器などの管理ができるようになることも重要になってきます。そのため、就学前より、自分で聞こえのチェックができ、補聴器などの操作や着脱ができるように援助していきます。

